
Trump

ものにのら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Trump

【Nコード】

N4261J

【作者名】

もにのら

【あらすじ】

”世界は『カレ』を特定し始めた”。

人は誰でも『普通』を持っている。

記憶と自我から構成されているモノ。

それは『常識』。

その人だけにとつての当たり前。

その『普通』が通じる範囲が日常というヤツで。

日常には周期があつて、それ以外に起こる現象なんて、全て『差

異』だと。

空閑直哉は信じていた。

けれど、空閑直哉は出会ってしまっ

昔から夢見た一人の少女。

名前の知らない少女。

『日常』の中、湧き出した、たった一つの『異常』。

そして、その時から歯車が軋み、間違った方向に動き出す。

消えたのは『普通』。

崩れたのは『日常』。

失ったのは『平和』。

そして始まるのは一つの狂った物語。

「くふふっ・・・貴様、識っているか　？頬の肉は、最も旨い」

壊れ果てた『日常』の中で。

辿り着いた『異常』の中で。

直哉の『普通』は変わっていく。

人間謳歌狂想凌辱物語。

狂った旅は、いつ終わってくれるのか。

ブローグ - 夢・Memory - (前書き)

『ロクな思い出なんてない』

プロローグ - 夢 - Memory -

利用規約

最初に。

あなたはこのゲームを、抜け出しても良い。

思い出は美化される。

「昔はああいう事もあったね」とか。

「あの時は辛かったよな」とか。

「でも、今思えばあれも良い経験だったな」とか。

既に確定された事象 ”過去” というモノは、よく『こう』語られる。

けれどそれは決してその事象が本人にとって軽かったワケではない。

苦勞以上^{トラウマ}精神的^{トラウマ}外傷以下。

重すぎず、軽すぎず その程度の”過去”はよく『そう』語られる。

それはただ たった一つの欲。

それを達成^{クリア}出来た自分を褒めたい、大きく見たい、認めて欲しい。

そういう普通 人として当然の^{エゴ}欲。

だから、僕もそうだった。

「ナーヤ、いつしよにあそぼー！」

「うん、いいよー！」

女の子の声。

彼女は幼く、僕自身も幼い。

とても幼い 昔の話。

「ナーヤ！またあしたも遊ぼうねー！」

恐らくは日常。

その一片。

何も変わりはない繰り返しの一部。

人生には幾つか段階があつて、そこに至るまでは繰り返され続けると信じている日常。

思い出は、美化される。

「ナーヤ、『あたし』ね・・・おおきくなったら になりたい

」!

金髪の女の子。

同じく金色の瞳を持つ女の子。

肌は白く、まるで人形みたいな『がいじん』の女の子。

「だからナーヤは『あたし』の」

そういう特別な少女が僕の隣に居た。

気がした。

「・・・にな の・・・ナー・・・」

ノイズが酷い。

頭痛と耳鳴りがする。

小さい頃、『そういう』女の子が居たのは知っているのに。

誰だっ たっ け？

名前が、思い出せない。

ただ一つ覚えているのは。

「だから、『あたし』がおおきくなったら、ナーヤは『あたし』の

」

僕達は、『規約』を立てた。

二度と消せぬ契約を結んだ。

永遠に縛り続ける制約を誓った。

けれど、その幼い約束は

「だから、ナーヤ おおきく・・・ったら、『あたし』・・・ナ

ーヤの になるの」

ノイズに塗^{まみ}れていた。

思い出は、美化される。

過去は軽く見積もられ、忘却の彼方へと消え失せる。

人間には、忘れてはいけない記憶なんてものは存在しない。

ただの情報の塊で、ただの精神のほんの一部であるそれは、簡単に焼却を許される。

「ぼくも のこと・・・」

残されたのは、名前の知らない女の子と、淡く薄い自分^{きおく}のみ。

そこから、始まる。

GAME START

ブログ - 夢・Memory - (後書き)

さて、初投稿です。

まあ、さりげなくこの後更新に空白がありますが、できれば気にしない方向で・・・これからも頑張って書いていくので、見放さずに見続けてほしいですっ！

とりあえず、次回『キャラクター紹介』。

Episode 1 - Spade (前書き)

『キャラクター紹介』

Episode 01 - Spade

・キャラクター

【奴隸】

空閑 くが 直哉 なおや

年齢：15歳 身長：157cm 体重：49kg 誕生日：9

月12日 血液型：A型

好きなもの：カードゲーム

嫌いなもの：暴力、神頼み

黒髪に黒眼。背はやや小柄で無愛想な少年。星来学園一年生。

勉強や運動や成績も平均的で、趣味はカードゲーム。特技はババ抜きでババを引くこと。

「祈りなんて嫌いだよ・・・どうせ誰も聞いてくれやしないんだ」

【運命】 サイコロ

サイス

年齢：?? 身長：127cm 体重：26kg 誕生日：6月

66日 血液型：??

好きなもの：直哉

嫌いなもの：直哉以外の人間

妄想：『快樂』

能力：快樂エメンの御手

肩まで伸ばした金髪に金色の瞳を持つ少女。

とある不思議な力が使え、複数の人物・組織から狙われている。

そのボディガードとして直哉を勝手に『非日常』へと巻き込んでい

く。

「くふふっ・・・貴様、識っているか　？頬の肉は、最も旨い」

【姉と母】

空閑 禮音

年齢：16歳 身長：158cm 体重：47kg 誕生日：1

2月18日 血液型：A型

スリーサイズ：B83（C）/W58/H82

好きなもの：ババ抜き

嫌いなもの：虫

肩まで伸ばした淡い栗色の長髪に、同じ栗色の瞳をした少女。星来学園二年生。副生徒会長を務める。

幼少から両親を亡くし孤独だった直哉の面倒を見ており、常に直哉の事を気にかけているお姉さん。その過程で家事を完璧にマスターしており、その上勉強・運動・成績全てが優秀な秀才。

「直哉くんにはババ抜きで勝っている間は、私がお姉ちゃんですよ」

【兄と父】

神崎 新實

年齢：17歳 身長：169cm 体重：58kg 誕生日：6

月8日 血液型：AB型

好きなもの：勉強

嫌いなもの：頭が悪い奴

中肉中背、黒髪黒眼の少年。星来学園二年生。禮音とはクラスメイト。生徒会長を務めている。

学園でダントツトップの人気を誇る文化系の美少年。勉強・運動・

成績・容姿・性格、全てが完璧な優秀すぎる秀才。

「人間というヤツはキツチリ四等分出来る。『天才もしくはバカ』か『秀才もしくはアホ』かのいずれかだ」

【妹と幼馴染み】

かんざき
神崎

しほ
紫朋

年齢：15歳 身長：152cm 体重：43kg 誕生日：1

1月21日 血液型：B型

スリーサイズ：B76（B）/W54/H77

好きなもの：友達

嫌いなもの：大人

黒髪黒眼。髪型はツインテール。体格はやや小柄だが元氣と騒がしさは人十倍ぐらいある少女。星来学園一年生。直哉とはクラスメイト。

兄の新實とは違って、体育会系。直哉と同じく至って凡人で、運動も平均的・成績は残念。禮音や新實、所謂『優秀サイド』に心底憧れている。

「にーちゃんとなーちゃんはいつも仲良しだねっ！」

【小動物少女】

おんだ
恩田

みほ
美保

年齢：16歳 身長：150cm 体重：44kg 誕生日：5

月1日 血液型：O型

スリーサイズ：B79（C）/W55/H79

好きなもの：占い

嫌いなもの：鼻ピアス

黒髪黒眼。髪型はショートカット。眼鏡を掛けている小柄な文化系の少女。星来学園一年生。

酷く臆病な性格で同性との人付き合いすら出来ていない。その中で唯一紫朋とはクラスメイトかつ小学生からの親友で、その立場上直哉とも深く付き合っている。趣味は占いと読書。

「あう・・・あの、占いつていうのは『当たる・当たらない』じゃなくて、『外れる・外れない』、なんですよ・・・」

【トラブルメーカー】

茂田 拓夢

年齢：15歳 身長：161cm 体重：52kg 誕生日：8月11日 血液型：B型

好きなもの：女子
嫌いなもの：テスト

茶色に染めた髪に黒眼。体格は結構ガツチリしている。自称「世界で一番輝いてる男」。星来学園一年生。直哉とはクラスメイト。平凡で凡人な上、極端な目立ちたがり屋で見栄っ張りで、ついでに究極の変人。そして友達が居ない。その凄まじいまでに持て余した暇を潰す為に唯一の友人である直哉に毎回絡んでくる。

性格は非常に明るくうるさく、いつもぶっ飛んだ事を唐突に言い出す。類希なるまでに研ぎ澄まされた、天賦の才を持つ究極の変人。「やつほー！俺、今日もぶっちぎりで輝いてるっ！」

【不良】

前田 京司郎

年齢：18歳 身長：179cm 体重：80kg 誕生日：9月9日 血液型：O型

好きなもの：値段とクオリティが反比例するカップラーメン
嫌いなもの：大きさが足りないコップ

金髪の鼻ピアス。つまり不良。星来学園三年生。新實を執拗なまでに敵対視しており、そのついでに直哉を毎回いびってる。

「ちよ〜つとツラとカネ貸してくれるだけでイイんだよ、なァ！俺達シンユウだもんなァ！直ちゃんよ！」

【脇役】

佐間 小次郎 さま じろう

年齢：18歳 身長：175cm 体重：66kg 誕生日：2月22日 血液型：O型

好きなもの：甘いモノ
嫌いなもの：甘いヤツと生意気なヤツとついでに不良

茶髪に赤い瞳。背が高く体格がガッチリしている男性。星来学園二年生。

新實の唯一の『親友』と言える人物で、クラスメイト。サンングラスを掛けると完璧なヤザな容姿だが、『至つて普通』な上に『常識人』な上についてに不良じゃない。そのクセ性格は人見知りで寂しがり屋という、新實曰く「めんどくさい」ヤツ。
「フツ、孤独な男はクールに生きるぜ」

【ケダモノ】

浅沼 あさぬま

年齢：25歳 身長：177cm 体重：50kg 誕生日：5月6日 血液型：B型

好きなもの：殺すこと

嫌いなもの：人間

荒んだ黒髪に淀んだ黒眼すざをしている老人のような青年。常に全身に大量の包帯を巻き付け、その容姿のほとんどを隠している。

その正体は脱走した死刑囚で、快樂殺人者。サイスを求めて深夜を徘徊している。

直哉達と最初に戦う敵となる。

「アア・・・貴様、識っている力・・・腐った骨八肉より旨イ・・・」

【子供】

オウ

年齢：??？ 身長：??？ 体重：??？ 誕生日：??？ 血液型：??？

好きなもの：快樂

嫌いなもの：退屈

翡翠色の髪と琥珀色の瞳。少年と少女の間みたいな顔や声をしている。

突然現れて、唐突に消えて行く謎の多い人物。

「ボクの名前はオウ 王様のオウでもイイし、応答のオウでもイイヤ」

【吊された男】

カレ

年齢：??？ 身長：174cm 体重：65kg 誕生日：7月

7日 血液型：AB型

好きなもの：神

嫌いなもの：人

とある部屋で常に吊され続けている男性。全身を有らゆる鋭器に串刺しにされて縫い付けられている。

オウが目指す最終的な存在。

「気が狂いすぎる程の快樂が欲しい・・・」

Episode 1 - Spade (後書き)

さて、キャラクター紹介です。

まあ、この段階で見ても全然頭に入らないんじゃないだろうか

あ・・・物語が進展したら、増やしたのをまた載せてみます。

とりあえず、次回『ナーヤ』。

S p a d e . - 0 1 ゼロからイチへ - G A M E S T A R T - (前書き)

『ナージャ』

「な、おや・・・？」

「な・・・ナオヤ・・・」

「ナオ・・・ナ・・・ナーヤ！」

くが な お や
空閑直哉。

それが僕の名前だ。

でもあの子はそれが言えなくて。

だから僕の事を『ナーヤ』と呼んでいた。

「ナーヤ！ナーヤ！」

「ナーヤ、いつしよにあそぼー！」

そう言つて、いつも僕の後ろについてきた。

長くて綺麗な金色の髪に。

遠くからでも目立つ金色の瞳。

ほくたち

日本人より見て分かる程に白い肌。

まるでお人形みたいに、白くて小さくて綺麗な女の子。

「ナーヤ、お・・・おに・・・お おにかけっこ！しようー！」

「ナーヤが鬼で、『あたし』が逃げるの！」

「捕まえて！ナーヤ！」

「うん！」

彼女が走り出す。

僕も走った。

見慣れた街に。

見慣れた背中。

いつもの風景。

それが日常だった。

「ナー・・・」

「ナーヤ・・・」

彼女は、僕をそう呼ぶ。

舌つ足らずな日本語で。

それが僕の名前。

彼女の中での、特別な僕の名前。

「・・・ナー」

「ナーヤ」

「ナー」

「ナ」

「なーちゃん!!」

「うわあっ!？」

そして、始めに見えたのは、光。

視界を覆い尽くすどころか、閉じた瞼の奥に思い切り突き刺さり頭痛をプレゼントしてくれる忌々しい日光。

ああ、朝だ・・・

いつもの朝だ・・・

「やっと起きた!なーちゃん、今日も時間無いよ!早く!!」

「か、勘弁してよ、紫朋・・・」

隣から聞こえてくる金切り声を餌に頭痛が大きくなっていく。なんで女の子の声はこんなに頭に響くのだろう・・・

そう、女の子。

あの金髪の女の子とはまた違う女の子。

名前は、かんざし神崎紫朋。

金色とは違う、日本人らしい黒髪のツインテールと黒い瞳。

着ている服は、星来学園の制服。

『僕達』の通う学校の制服だ。

「勘弁しない!本当に時間が無いんだから!さっさと着替える!」
「わ、分かったよ・・・怒鳴らないでくれ、頭に響く・・・」

身体は小柄なクセに、態度と声と元気は大きい上に有り余ってる。そんな感じで毎回僕を『起こしてくれている』から、朝はいつも気怠い上に素敵な頭痛と耳鳴りがセットでついてくる。

ちなみに、紫朋が僕を『起こしてくれている』のは至極簡単だ。

僕は一つ、個性を持っている。

不眠症　　そういう名の個性を。

病気ではない。

何故なら、それは『身体の異常』じゃないからだ。

原因が無い。

それだけでそれは『異常』なんかじゃなくなる。

これはただの個性。

だから、僕は紫朋を振り回して扱き使っている　　という事になる。

僕はその事を申し訳無く思っているし　　そしてそれを承知で『頼んで』いる。

至極簡単な理由だ。

「ほら早く！遅刻しちゃうよー！」

「ああ・・・出来れば後一分・・・いや、三時間寝かせてくれ・・・」

「もうそれ昼だし！」

「人間は朝から動ける様には出来ていない夜行動物なんだからしようがないだろ・・・ぐう」

「そんなのオタクでヒキコモリななーちゃんだけだよ！二度寝するなー！！」

バツ！

布団がどこかへ飛んでいく音と共に、視界が日光で白く染まる。

「あう・・・眩しい・・・」

「早くしないとまた朝ご飯食べられなくなるよ！」

「・・・あー・・・それは困る、なあ・・・ふああ・・・」

欠伸をしながら、ゆっくりと身を起こす。

ようやく頭が半分程覚醒してきた。

しよぼしよぼする眼を擦りながら、壁に掛けてある服を手取る。
これぐらいされなきゃ起きないから困る

僕のこの不眠症は、目覚ましなんかじゃまず起きない。

水をぶっかけるなり、蹴り飛ばすなり、耳元で大声で怒鳴るなり
しなければまず起きない。

それぐらいに酷い。

「なーちゃん、まだ!?!」

「わかつてるって!頼むから怒鳴らないでくれ・・・頭に響く」

朝は嫌いだ。

耳鳴りと頭痛がする。

「早く!なーちゃん!!!」

「・・・ねえ、紫朋」

「後で聞いてあげるからとりあえず早くして!」

「うん・・・じゃ、とりあえず・・・」

扉を指差して、言う。

「・・・早く出てってくれないかな・・・着替えるんだけど・・・」

「そんなモノ見ててあげるから早く!」

「見なくていいよ!っていうか、そんなモノってどういこと!?!」

「何照れてんの!アタシとなーちゃんの仲じゃん」

「僕と紫朋の・・・?」

僕と紫朋の関係

友達?

幼馴染み?

クラスメイト?

全部合っていて、違う。

「いや、そうじゃなくて!わざわざ着替えを覗く友達や幼馴染みや
クラスメイトなんて居るか!さっさと出てけ!」

「きゃああああああっ!なーちゃんどこ触ってるのよ!!!」

「背中だよ背中!アホなコト言ってる暇あったら先に飯食べてるよ

「!!」

「あははっ！なーちゃん！時間無いんだから、遅いと先行っちゃうぞっ！」

「……っていうか、時間が無いなら、からかわないですよ……」

トッテッテッテ。

ようやく閉じた扉の向こうから響く小気味良いリズムの足音が徐々に遠離とおいっていく。

紫朋の足音が。

妹の足音が。

紫朋は、そう

僕にとつて、家族に近かった。

つまり紫朋にとつて、この行為は

「……どんだけ暇なんだ、アイツ……」

足音が刻むリズムが完全に消えてから、一言だけそう呟いた。

さて、よくやく書き始め！感想や指摘などがあつたら、ドンドン送ってきて下さい！

まあ、例えどんなに悪評価でも全然構わないので、一切遠慮せず
に書き込んで下さい！お待ちしております！

とりあえず、次回『朝は嫌いだ』。

S p a d e - 0 1 ゼロからイチへ - G A M E S T A R T - (前書き)

『朝は嫌いだ』

・・・朝は嫌いだ。

「おはよう・・・」

眠い。

「おはよう、直哉くん」

「ああ、おはよう直哉・・・相変わらず今日も時間無いぞ」

「なーちゃんおっはよー！！」

聞いただけで気力が萎えてくる僕の挨拶。

それを出迎えたのは、三人の声。

一人は神崎紫朋と。

「・・・いや、紫朋との『おはよう』はもう終わったでしょ」

「朝の挨拶というスキルに回数制限は無いのだ！さあなーちゃんも

もう一度っ！」

「嫌だよ！朝って事実を何度も再確認したくないよ！！」

「ちえ、ぐーたら」

「朝は嫌いなんだよ・・・眠いし怠いし辛いし萎えるし・・・」

「直哉らしい台詞だね」

「なーちゃんはだらけてるだけだよ、にーちゃん！」

「しょうがないと思うわ・・・直哉くんはそういう病気なんだから」

もう一人は紫朋の兄　名前は神崎新實。

中肉中背、黒髪黒眼。

至って普通で健康な日本人少年。

そして、もう一人は僕の姉さん　名前は空閑禮音。

肩まで伸ばした淡い栗色の長髪と、同じ栗色の瞳。

多少日本人離れた容姿だけど、義理じゃなく、血の繋がった姉

弟だ。

「いや、姉さん・・・これは病気じゃない。ただの個性だよ」

「ん・・・でも、仕方無いと思うわ・・・」

問い質すと姉さんは気まずそうに視線を逸らす。

姉さんは、僕に引け目を感じている。

僕を『そういう目』で見る。

「じゃ、じゃあ直哉くん……お皿、運んでくれる……？」

「……分かったよ」

釈然とはしなかった。

けれど時間は無かった。

だから、訂正なんてしなかった。

いつも通り朝は眠くて怠くて。

いつも通り朝は起きれなくて。

いつも通り朝は時間が無くて。

だから、何も言わなかった。

これも日常の一部で。

これがこれからも起こり続ける現象で。

時間はあるから。

「俺も手伝うよ、直哉」

「じゃあアタシは待ってるねっ！」

「いや、紫朋は手伝ってよ……」

そこからはいつも通り。

食事をした。

時間を合わせて準備をして。

登校、した。

僕には両親が居ない。

そして、親戚も居ない。

引き取られてもいない。

だから、あの家には。

棄てられるハズだった、あの残された家には。

僕と姉さんだけが住むハズだった。

二人つきりで、たったの二人で住むハズだった。

死ぬか殺されるか助けられるか、いずれかを選ぶ時が来るまでた
ったの二人孤独に住み続けるハズだった。

けれど、結局はどれも違った。

お隣さんである神崎家が、形の上では僕達を引き取ってくれた。

そして、新實と紫朋は基本的に僕達の家に居てくれる。

部屋は神崎家にあつて、夜は大抵そこで寝るけれど。

一緒に寝る事も結構あつて、それ以外の時はいつも一緒に。

僕達は四人で生きてきた。

親も部屋もあるのに、神崎兄妹は僕達の家にいつも居てくれた。

だから、お隣さんで。

幼馴染みで。

けれど違う。

『家族』。

僕達はそういう関係だった。

いつも。

いつも、いつも、いつも。

毎日、毎日、毎日。

僕が起きれなくて。

だから家事は他の人がやってくれて。

紫朋は僕を起こしてくれて。

いつも時間が無いと言いながら、食事を作つて、一緒に撮つてく
れて。

家と学園が近いから、いつも遅めに出てしまつて。

それでも目の前の、たった数十メートルの距離を、一緒に登校し
てくれる。

そういう日が続く。

今日も、明日も、明後日も。

そういう日が続いてきた。

今日も、昨日も、一昨日も。

そうやって、それは日常として処理されて。

サイクルの一環に組み込まれる。

もう当たり前。

こういう関係が僕達の中の当然だった。

G A M E S T A R T

S p a d e - 0 1 ゼロからイチへ - G A M E S T A R T - (後書き)

さて、レイアウトを変えてみた。

まあ、表示も色々と変えてみた。

とりあえず、次回『熱い友情そのいち』。

S p a d e - 0 1 ゼロからイチへ - G A M E S T A R T - (前書き)

『熱い友情そのいち』

「おっはよーっ!」

「・・・」

「ここは、1-A。」

僕と紫朋の教室。

朝一番、そこに入ると同時に、隣から大きな挨拶が響いた。

紫朋の声だ。

「あ、おはよー」

「おはよー神崎」

普通に返してくれるクラスメイト。

ただ、返す方は普通かもしれないけど言う方は絶対に普通じゃない。

何と言っても今時の若者の流行は『クール』。

キメる。

ただひたすらキメる。

何があってもキメる、キメ続ける。

あくまで自己満足を追求した『カツコイイ』を目指して、常にキメ続ける。

そして、キメにキメすぎて気持ち悪い事になっても、無理矢理キメる。

「服装が乱れてる」とか、「キャラキャラしてる」とか、文句や規制が作られていっても、キメる、無視してキメ続ける。

それが無駄に無数の流行を作り出して、そして時代を作っている。

周りがそんなんだから、もう常識なんて簡単にすり替わっていて、『周り』に含まれなかった一世代の『古い人達』とかいうヤツとは、もう全く違う人種になりすぎていて。

だから、こんなことはもう『恥ずかしい』。

そういう常識になってしまった。

そういうのが『普通』になってしまった。

「……熟々（つくづく）面倒な世の中だよ……」

「ん？何が？なーちゃん」

変人の定義。

それは、『普通』ではないこと。

だから、紫朋はある意味、『変人』だ。

『クール』とはあまりにも懸け離れている。

だけど、この『変人』はマイナスではない。

皆に受け入れられてもらえる、必要とされる、プラス方向の『変人』だ。

だけど、真に重要なのは、それを気にしないコト

他人達が勝手に作った小さな『普通』に流されず、自分らしさを
出せるコト。

「いや、紫朋は凄くなって」

「え？何を褒めているのかよく分からないんだけど……？」

新實は文化系なのだが、それに似ず、紫朋は生粋の体育会系。

そう、体育会系という名の、プラス方向の『変人』。

けれど、それを気にしない紫朋にとって、挨拶なんてモノは大したモノではないのかもしれない。

けど、そんなのは関係ない。

それは『普通』には出来ないコトで。

自分だって出来ないコトで。

だから、それは確実に長所で、褒めるべきコトだと思った。

「……ん、何でもないよ」

ただそれを口に出すのはやっぱり恥ずかしい。

何と言っても今の時代の流行は『クール』だからな……

「……まあ、また隣でフルボイスの『おはよう』を聞いて萎えて
るだけさ」

ちなみにこれは本音だ。

「というか、朝から耳元で叫ぶのは勘弁してよ……頭に響く」
ちなみにこれは嫌味だ。

こういったモノなら、簡単にスラリと言える。
人というのは、本当に面倒に出来ている。

こうじゃなかったら世界はもつと平和になっただろうに……

「……なーちゃんって、ホントぐーたらだよねえ……」

「……」

ちなみにこれは、暴言と言います。

これを他人に言うコトで、人は快楽を覚えます。

……紫朋は意外とサディストかもしれない。

「んじゃまた後でね、なーちゃん！」

そしてそれを自覚していない一番めんどくさいタイプだ、これは。

「熟々（つくづく）難儀な世の中だよ……」

僕もそう呟いて、席に着いた。

本当に、朝からロクなコトがない……

「よお、直哉！」

「……よお、変人」

そして席に着いたら変人コイツが居た。

というか、思い切り待ち構えてた。

紫朋とはまた違うタイプの変人だ。

……やっぱり、今日は朝からロクなコトがない。

「誰が変人だっ！！誰が！」

「なんだ、変態の方が良かったのか？」

「なんでそんな二者択一なんだよっ！！ロクなのねーじゃねーか！」

「！」

「分かった。じゃあ変態に変人にセットで告訴と前科までもれなく
ついてくる『THE・拓夢セット』を献上しよう」

そう、コイツの名前は茂田しげた拓夢ひろむ。

髪を茶髪に染めてるけど、多分不良じゃない。

結構体格がガツチリしてるけど、多分不良じゃない。

頭が若干どころか大変悪いけど、多分不良じゃないかもしれない。
とりあえずロクなヤツじゃない。

「お前、俺に怨みでもあんの!？」

「強いて言うなら、朝から大声でうるさい。しょうもないツッコミを入れる度に叫ぶのがうっさい。更に何か発音する度に机をドンドン殴りつけるのがうっさい……」

「うっさいばっかじゃねーか!！」

「まだまだあるぞ」

「もう言わなくていいわ!！」

「まだまだあるぞ」

重要なコトなので二回言いました。

「くあああああああつ!！それが親友にかける言葉かああああ!
!お前は俺様をなんだと思ってやがる!！」

「親友未満友達未満だろ」

「赤の他人!？」

「正確に言うなら、他人未満空気未満だけどな」

「くあああああああつ!さっきから聞いてれば直哉、てめえ裏切り
やがったなあ!！」

「裏切るも何も、仲間になった覚えなんてお前の英語の答案テスト
の点数並にねーよっ!！」

「全っ然!ねーじゃねーかっ!！」

なにこの悲しい会話。

コイツと一緒に居ると、言いもしれない悲しみの渦に巻き込まれ
てしまいそうだ……。

「近寄つてくんこの野郎!！」

「くあああああああつ!！だからそれが親友に対する態度かつ!
!裏切りの代償として今日の宿題を俺様にコピー&ペーストさせる

コトを要求します!！」

「宿題ぐらい、自分でやれよ・・・」

中々に渾身の皮肉も、この男には無駄だったようだ。
というか、会心の一撃でもコイツはきつと倒せないぞ。

「バカ野郎！宿題つてのは、見せる為にあるんだろ？その為の友情
だろ！？」

「勝手に友情を捏造するなよ、どこかの週刊誌に叩かれてもしらね
えぞ」

「バツカ野郎！友情つてのはなあ、その半ツ分が！宿題の見せ合い
で出来ているんだぜ！」

しょうもない友情もあつたものだ。

「その理論じゃ、バリバリ優等生は友情が無いみたいになつちまう
ぜ？」

「ああ、そうだツ！あんな奴等は友情なんか大切にしねえ！だけど
俺達劣等生はそれが全て！マジ大切にしていっくつ！！」

「俺『達』とかつけるな、マジに」
シヤレになつてない。

「あの〜マジ、一時間目の分だけでもいいから、見せてくれません
か？チヨイチヨイ、と。いやあ、マジお願いしますワ、大統領」

成り行き友情強引作戦に失敗した拓夢は、その姿勢を見事に18
0°転換して、ヘコヘコと低姿勢で迫ってきた。

「が、どっちにしても気色悪いので、適当に切り返しておくとする。
」一つだけなら別にイイんじゃないかね？補習受けてもさあ」

ちなみに、この学校には、「宿題をやつてこなかったヤツは放課
後補習」なんて素敵で迷惑なモノがあつたりする。

「いや、全教科補習だと、流石に死んじゃいますんで、ボク」
まさかの全教科だった。

「もう死亡ルートまっしぐらじゃん？諦めたら？」
ちなみにコイツには友達が居ない。

居るワケない。

だって変人だもの。

というワケで、コイツはもう色んな意味で詰みだった。

そりゃもう、将棋で飛車×4に囲まれた単独の王将並に。

宿題の量は結構シヤレになってないものが多い。

「そ・こ・はッ！アナタ様の素敵で立派な煩惱にッ！こつ頼ってるワケですよ！！」

「じゃあな、元親友」

「ああああああああああつ！待つて！いかないで！アナタに裏切られたらアタシもう生きていけないわっ！」

「気色悪いわっ！！」

かなり気色悪いニユアンスで抱きつきを迫ってくる変態を、なんとか間一髪回避。

「あぶしっ！！」

ゴキンッ！

そのまま変態は椅子の角に前頭部を盛大にぶつけて、奇妙な声と凄まじい音を鳴らした。

「・・・生きてるか？」

一応声をかけてみる。

「・・・ッ！ッ！！」

返事の代わりに頭から大量の血を流しながら、ビクン、ビクンと二回程大きく痙攣。

どうやら元気がしかった。

「生存確認」

まあ、本当に生きているかはさておき、いつもの光景に、誰も気にすら止めていない。

まあ、その内起き上がってどこかへ行くだろう。

こつして、悪き騒音フルボイスは退治されましたとさ。

めでたし、めでたし。

「さて、と・・・紫朋ー、おーい」

「ん？どーしたの、なーちゃん」

が、どんなヒーローでも暇になる。

例え一人で何千人もの命を救った英雄スーパーマンだろうが、コトが終われば後に待ってるのは平和と退屈のみだ。

まだHRには少し時間がある。

けれど、特にやる事がない僕は、とりあえず紫朋と話して時間を潰すコトにした。

「やー、暇になったし？」

「って、なんでアタシのところに来るのよ」

「うーん、なんとなく、かな」

他に友達居ないしね。

「あ、あのっ……」

「ん？」

声をかけられて、始めて紫朋の隣に座っている女子に気付く。小さい女の子だ。

「あつ、その……お、おはよ、う……えっと、空閑さん……」
騒がしい朝の喧噪に簡単に打ち消されそうな程に、小さな声。

「ああ、おはよう、恩田さん……」

「あ……そ、その、きよ、今日もいい天気、だねっ……」

その弱々しい声に辿々（たどたど）しい態度に、やや舌足らずな口調。

例えるなら、怯えた小動物を連想させるような少女。

名前は恩田おんだ美保みほ。

ショートカットの黒髪に黒眼。

眼鏡を掛けていて、背が小さく小柄。

体格は紫朋と同じぐらいなのに、性格は体格に反比例しまくっている紫朋とは、実に対照的だ。

だけど、挨拶をしたぐらいで顔を真っ赤にして俯くのはやめてもらいたい。

こっちまで恥ずかしくなる。

「あ、うん……そうだね、いい天気だね……本当……」

ちなみに紫朋と恩田さんはかなり昔からの親友らしい。らしい、というのは、僕も良く覚えていないからだ。

気付いた時にはいつも紫朋の隣に居た。

ついでに僕も、ずっと紫朋とクラスメイトだったから、僕の隣にもずっと居た。

だから、僕と恩田さんはかなり深い付き合いになっている。

けれど、彼女はずっとこんな感じだった。

前から、昔から、最初から。

いつでも弱々しくて、辿々しくて。

一度も変わったりはしなくて。

ちよつと触れるだけで泣いて怯えそう。

紫朋だけには少しだけ心を開いていて、よく色々なコトを話して笑っているけれど、それも僕の前ではほとんどしなくて。

僕が、男性が、異性が恐いらしくて、今でも二人つきりにでもなってしまうたら会話なんて一つも続かない。

だから、僕と彼女は深く関わってはいえるけれど、ただの『友達』だった。

どれ程かと言うと、十年近く付き合ってたながら、未だに互いに名字で呼び合ってるぐらい。

「・・・はい・・・」

そして、会話終了。

何もやる事なくなつた。

というか、気まずい・・・。

「あ、そうそう！前に言ってた本！あれどうなった？美保ちゃん、読むの早いから、もう終わっちゃってたりする!？」

さすが紫朋。

我が妹（自称）、ナイスすぎる。

「あ・・・それなら、はい・・・」

もう一人の少女も「助かったあ」みたいな感じが籠もった吐息を漏らして、早速身体の向きを変えた。

・・・僕、要らない子じゃあないだろうか？
空気みたいな存在になってるかもしれない。

「お、おおっ！いっやあっ！美保ちゃん読むの早くて本当助かるなあ
！もう廃人レベルって感じ！！」

「わ、私、いつも本ばかり読んでるから・・・」
いや、そんな事はないようだ。

さっきから、恩田さんがチラ、チラと視線を向けては恥ずかしそ
うにしている。

凄く、邪魔なようです。

瞳が「帰れこの野郎」と物語ってます。

「へえ、紫朋が本読むなんて珍しいな、なんてタイトル？」

このままでは空気　ゴミ（つまり邪魔）にランクアップしてしま
いそうなので、とりあえず会話に乱入してみるとする。

「へっへーん、これはねえ、前のなんたら大賞を取った・・・」

「『神様の創ったセカイ』、です・・・」
意外にも恩田さんが答えてくれた。

緊張してないのかな？とか思ったけどこれはダメだ。

顔が真っ赤だもの。

「そう、ファンタジーものだよっ！」

「いや、紫朋はファンタジー以外無理だろ」

まあ、紫朋が読みたいと言った時点で、それがファンタジーなの
は分かっていた。

女なクセに、紫朋は本好きだ。

本　　そう、漫画好き。

特にバトルもの。

特に、ファンタジーものが大好き。

更に、これでもかと言う程に王道なモノが大好きだ。

ほら、あのアニメにして何百話とか続くヤツ。

そんな紫朋が、ホラーやラブコメなんて読んでたら、本気で笑い
そっだ。

「むにに、なーちゃんだつてファンタジー以外読まないじゃん。アタシだけ子供みたいに言わないでよねー」

「別に、そんなつもりないよ・・・僕達は、まだ全然子供だ・・・」
十六歳。

社会にしか出れない、俗に言う高校生なヤツが大人だなんて、笑わせる。

たかがバイトをかじった程度で。

たかがふんぞり返ったところで。

たかが知識を多少つけた程度で。

大人はまだまだ遠い。

僕達は、まだ働く事さえできない、小さな子供だ。

「あ、あのっ・・・じゃ、あ・・・空閑、さんも・・・これ、読みます、か・・・？」

随分控え目な感じで、恩田さんが僕に訊いてくる。

何故、そうなった・・・？

「えー、なーちゃんも読むのー？」

「なんで、嫌そうな顔するんだよ・・・」

「そ、ソナナコトハナイヨー？」

ザ・マシンボイス。

説得力の欠片もない。

「あー、じゃあ恩田さん、紫朋が読み終わった後に、また僕に貸してくれるかな？」

「は、はいっ・・・お願いします・・・っ!!」

ヤケに気合の入った頼み方だな・・・。

なにか、本人にとって重大なコトでもあるのだろうか。

「はあ・・・なーちゃんの、バカ・・・」

そして、然りげ無く聞こえてきた紫朋の呟きが、かなり不安を増長させたりもした。

「あ、あのですねっ、別に返却期間とかは、その・・・ないんで、よくよんでください・・・」

まだ借りてすらいないのに、そんな事言われても困る。

紫朋が読み終わらなきゃ借りれないし。

「あ、あのっ、別にカバーがついてるからといって、汚さないでとかっ、その・・・気軽に使ってくれて、構いません、からっ・・・」
「どうやら恩田さんにとって、この小説はかなり大切らしい。」

少なくとも、今までこんなに顔を真っ赤にしつつも、必死に舌足らずに何かを語ってくれたことはない。

さて、どうしたことやら。

「わ、分かったよ、恩田さん・・・それじゃ、そろそろHR始まるから・・・行くね?」

「は、はいっ・・・お引き留めしてすみませんでした・・・」

ロクでもない予感だ。

こういうノリは大抵。

ロクでもないコトを、引き起こす。

けど、結局何が起ころのかなんて、まず分からなくて。

結局、僕にできることなんて、何もなく。

ただ、流されるしかないのだ。

G A M E O V E R

さて、ここらと次の話、かなり修正してます。ご迷惑をおかけしました。

まあ、レイアウトも色々変えているということので。
とりあえず、次回『熱い友情そのに』。

S p a d e . - 0 1 ゼロからイチへ - G A M E S T A R T - (前書き)

『バツカじゃねーよ!』

差異はある。

昨日と今日、そして明日は全く同じではないように。

もし、昨日と違う会話や出来事が起こったとしても、それは日常の差異。

日常に含まれる乱数で、それがあから毎日違う。

ただそれはあくまでほんの微量で。

大きな変化なんて、決められたレールの上でしか来なくて。

面白いコトも突然も変異も全部漫画やアニメの中の出来事で。

だから、これは日常。

いつまでも続くだろう。

もうそれは社会というサイクルの中に取り入れられているのだから。

それでも何かが起きて。

何かに巻き込まれて。

何かを成し得て。

そういう流れがあったなら。

それはきつと、必然。

社会が認めた必然なのだ。

「怨んでる！ああ、俺は怨んでるね！俺様は怨んでいるんだっ！」

「確かにソイツはヤベえな。中途半端なヤバさじゃない。なるほど、

つまりこれからお前はヤベリストだ、頑張れ負けるな・・・じゃ

「じゃ・・・じゃないですよ！！なんだよヤベリストって！！意味

わかんねーよ！！！」

肩を掴まれて、強引に歩み留められる。

いきなり謎なコトを叫びながら飛び込んできた変態から、適当なコト言つてさっさと逃げようとしたのだが、どうやら甘かったらしい。

「・・・で、なんですか、あなたは。初対面ですよな？」

「たった一人の親友なんて口を聞くんだお前は！あの互いに手を取り合い、握手した瞬間から、俺はお前の親友なんだろうがっ！！」
その程度で親友になれるのなら、ビジネスの度に親友が生まれていつて鬱陶しいコトこの上ないだろうな。

「分かった、分かった・・・んで、どうしたの、親友A」

「村人Aみたいに言うなっ！！」

「じゃあ変態Aで」

「他にロクなのなかったの!?!」

「ロクなのを求める時点で最早間違ってるだろ」

今は昼。

叫んでるのは拓夢^{バカ}。

生粋の変人兼変態だ。

つまりロクなヤツじゃない。

「くあああああああっ！！前々から思ってたけど！お前本当に親友かこらあ！！」

「違うわっ！！」

「否定すんなよっ!?!」

せめて、友達ぐらいで勘弁して欲しい。

悪友キャラが居る主人公とかは結構居るけれど、拓夢^{コイツ}だけはイヤすぎる・・・。

「ともかく!!俺は怨んでるんだよっ!聞けよ俺の話!!」

「・・・だから、何を？」

可哀相云々の前に、かなり鬱陶しいので、しょうがなく聞いてやるコトにした。

「貴様がツ!俺様をツ!裏切ったコトをだあッ!!」

「・・・なんかしたっけ、僕？」

「しただろ！朝！誰のせいで今まで保健室でぐったりしてたと思ってるんだッ！！」

「自分のせいじゃないの？」

「ちつがーう、だろっ！！」

涙を流しながら、肩を揺さぶってきた。

「アナタがそんな人だなんて思わなかった！アタシもつき合いきれないわっ！！」

「うざい。キモい。鬱陶しい。気色悪い」

そのオカマみたいな微妙なニュアンスが本気で気持ち悪い。

「お、おま・・・！それでも親友か、お前！！」

「だから違うっつってんだろ！！」

「だから否定すんなっつってんだろっ！！」

そもそもコトの発端は朝のアレ。

コイツが自爆して出血 保健室行き。

ギャグ補正だからと侮ってはいけない。

「けど、そのおかげで補習回避できたんだから、いいじゃん」

「バカ野郎ッ！俺にとってはこっちも結構地獄だったんだぞっ！」

「なんで保健室が地獄になるんだ？」

「お前！あの凶悪な兵器を白衣で飾り付けた天使！あの先生と二人つきりなどっ！俺の理性が音を鳴らして削られていく思いをした！」

うわあ、発想が危ない・・・。

まあ、確かに保険医の先生というのは、大抵美人と相場は決まっている。

だって、重症の身体で保健室まで行って、ケバいオバサンと二人つきりとか、精神的にツラすぎる。

けれど、そういう前例に漏れない程、ウチの保険医の先生は美人だった。

そりゃもう、必ず休み時間にはその美貌を拝みに来るヤツが何人居て、しかも結構大規模なファンクラブが出来上がってるぐらいには。

おく。

「よーいどん」

「だっしやおらアアアアアアツ!!」

謎の叫び声を上げながら疾走する**バカ**の拓夢。

自慢するだけあって、結構早いのだが、きつと、迷惑そうに見える生徒の視線なんて欠片も気にしてない。

まあ、まともにもやりあったらまず勝ち目はないな。

別に、勝ち負けすらどうでもイイ事なんだけど。

「さてと・・・」

一言呟いて、くるりと反転。

学食とは全く別の方向へ歩く。

「あー、皆、怒ってるかな」

少し遅くなりすぎたなー・・・とか、思いながら、先程までの出来事を頭の中でデリートして、歩みを早めた。

「あ、ごめん・・・待った？」

「遅いよ、なーちゃん！」

「ここ、中庭。」

結構広い。

無駄に広い。

目の前には三人。

紫朋と新實と、姉さんが盛大に弁当を広げて、僕を待っていた。

残された唯一の空間に座り、箸と弁当を受け取る。

昼食は『家族』で食べるモノ。

これ重要。

「ちよつと、バカの悪霊に取り憑かれてね・・・」

「・・・なーちゃんとひろむんって、ふつーに仲イイよね？」

端から見ればそう見えるかもしれない。

・・・凄く、イヤなんだけど。

「茂田拓夢。15歳。身長161cm、体重52kg。誕生日は8月11日、獅子座。血液型はB型・・・」

「・・・にーちゃん・・・」

「・・・新實、流石にそれは、気持ち悪いよ・・・」

ストーリーカー顔負けの情報量にもそうだが、何よりそれを暗記していたというコトに思わず引いてしまう。

もしかしたら、プライベートの情報まで握ってるんじゃないのか？

これはこれで『普通』じゃない。

イコール、変人。

・・・随分クールな変人もあつたものだ。

「あら、そうかしら？私もその辺の情報は、全部暗記^しってるわよ」

「・・・いやいや、てか、なんで知ってるの？」

「仮にも生徒会長だからね、生徒のコトは、なんでも知っていないと」

いや、最早それは犯罪の領域だ。

「私も、直哉くんの周りの人ならある程度覚えてるわよ
にっこりと姉さんスマイル。」

「・・・いや、だからなんで暗記するの？」

「だって、あまり人数がいらないんだもの」

「・・・」

そして、再びにっこりと笑顔。

姉さんは家事とか勉強とか、運動とかは凄く優秀だけど、こういうところは地味に天然だった。

「まあ、所詮なーちゃんの周りなんて、私か美保ちゃんかひろむんしかいないしねえ」

「所詮つてなんだよ、所詮つて！」

「『結局』の同類語だと思えばいいわよ。意味は同じだから」

「そういう意味じゃないよ！姉さん！！」

ニコニコと笑顔で答える姉さん。

天然はこれ^{これ}で、十分変人だよなあ・・・随分ピュアな変人もあつ

たものだ・・・。

「てかさ、なんでひろむん呼ばなかったの？面白いのにー」

「絶対ヤダ」

斬り捨てた。

うん、当然だ。

「お姉ちゃんも、一度はお喋りしたいな。なーちゃんのお友達と」

「恋人を早く一目見たい親みたいなのト言わないでくれる!？」

背筋が震えるぐらいイヤすぎる。

「別にイイじゃん。仲イイんだし、面白いし」

「・・・さつきから、紫朋、そればつかじゃん」

「えー？だって、ひろむん、ホントに面白いんだもん。なんでイヤなの?」

「そうだな・・・例えるなら、アイツと付き合ってみると想像してみるとイイ」

「・・・絶対ヤダし」

「だろ」

ほら、あれだ。

友達ならイイけど、恋人はダメっていうタイプだ、アイツは。

「・・・実は彼、転校生だよ」

「え、マジ!？」

「ええっ!？」

驚愕の新事実。

全然知らなかった。

「あら、知らなかったの?」

「・・・いや、だから、むしろなんで知ってるんだよ・・・」

生徒会、すげえ・・・

じゃなくて、これは多分、アレだ。

きつと脳の作りから違っているんだ。

多分そういう次元の問題。

「ちよっと特殊な転校だけだね。だから特別紹介されるコトもなく

て、目立たなかったんだと思う・・・まあ、知らなくても無理はないさ」

だから、なんであんだ達はそれを知ってるんだ、とツツコミかけたけど、やめた。

やっぱり、ポテンシャルの次元からして違う。

落ち込んだら負けだ・・・というか、次元が違いすぎて落ち込む事すらない。

・・・たまに、本当に人間なのか？と思わなくもない。

「詳細は今度FAXで送ろうか？」

「結構です」

別に知りたくもない。

「・・・てか、なんでFAXなの？口で言えばいいじゃん。同じ家に住んでも同然なんだし。同棲じゃん、同棲」

「紫朋、あんまり紛らわしい言い方しないで・・・」

噂にでもなったらイヤすぎる。

「そっちの方が手間かからないけどね・・・ほら、一応個人情報だからね」

「爽やかな笑顔で言うなっ！！」

やっぱり、犯罪の臭いがする・・・。

「っていうか！なんで知ってるんだよ！？個人情報まで網羅してるとか、怪しすぎるでしょ！！」

「こっに見えても、生徒会長だからね」

「・・・なんかもうそれ悪の組織みたいに聞こえる・・・」

いつから生徒会は個人情報まで調べ上げられる情報機関になったのだろうか。

「・・・ってか、まさかプライベートまで把握していいね・・・？」

本当にありそうで怖い。

「はは、さすがにそれはないよ」

「だよねえ・・・」

あつたら犯罪だしね。

「・・・多分」

「え！？多分！？多分って言った今！？」

「気のせいだろ」

「気のせいじゃないよ！！」

賑やかな昼食だった。

・・・賑やか過ぎて、どうかと思う程。

それでもこれは『差異』。

簡単に修正が効いてしまう、日常の出来事。

何事も無くただうっさいだけの昼食は進んで。

ただ楽しいだけの昼食が終わった。

日常は、ただ延々と繰り返される。

それが楽しいかそうでないかは別として。

それは有限で、決まった回数繰り返される。

でもそんなの自覚無くて。

だから、ふと無限と勘違いしてしまう瞬間が多くて。
さて

後どれだけ、この楽しい時間が続くだろう？

考えたところで、そんなの分かるワケがない。

だから、別に考えなくてイイ。

そんな小さな選択じゃ、所詮『差異』は崩せないから。

ずっと続くから。

周期が来るまで、変化は無いから。

だから、『日常』だろ？

「ねえ、にーちゃん・・・美保ちゃん、今日も一緒にご飯食べよう、
って誘ったのに、また断られたんだよ、アタシ、嫌われてるのかな

あ……」

「ああ、恩田美保さんか……彼女は極端に消極的だからね……仕方が無いと思うよ」

もう驚かないぞ。

「そういえば、あの子、最近あんまり元気ないわねえ……」

「悩みとかあつたら、アタシに相談してほしいのになあ……あ、そうだ……にーちゃんそういうのとかわからないの？」

「なんか、本人が聞いてたら人間不審に陥りそうな会話だなあ……」

「彼女が毎月買ってる本の新刊が、最近遅れ勝ちだからね。紫朋に貸した時も随分大切にしていたし、案外その事なのかもしれないね」

ああ、そうか。

だから、僕にもあんなに熱心に奨めてきたのか。

「つて、やっぱプライベート把握してんじゃん!？」

「……こう見えても生徒会長だからね」

「開き直った!？」

「……まあ、バレないからいいんじゃないかな？」

「……」

バレない『なら』じゃなくて、バレない『から』、か

最早、言葉もない。

「さっすがにーちゃん！頼りになるう!!」

「実際とても頼りになるわよ。事を選ばずに頼りになるタイプね」
「どこの完璧超人だよ、とツッコミたい。」

「というか、何故これだけやっていて、犯罪に抵触しないのか、不思議でならない。」

いや、まあそれも当然かもしれない。

天才は天才でも、新實は”ズル”をする天才だった。

ただ、”ズル”をしたとしても、それを決して発覚させない。

……あらゆる手段を使って。

利口とも言っし、小狡いとも言っ。

ただでさえ天才である新實が、”ズル”すらも反則的なまでに使
いこなすのだ。

もう、何をしても驚かなかった。

「・・・ホント凄いやね、新實は」

こんな男になりたい　　なんて気持ちすら抱かない程に、レベル
が違う。

違いすぎる。

そりやもう、清々しすぎて気持ち悪いぐらいに。

「そんな事はないよ・・・それより俺は、直哉の方が凄いと思うん
だけどね」

「・・・え？僕？」

いやいやいやいやいや。

まず、ありえない。

姉さんなら、新實程ではないにしろ、十分天才の部類には入って
いるし、紫朋はかなり独特の考えとか・・・まあ、口では説明しづ
らいけど、そういうモノを持っている。

この二人でもなく、僕なんて、拓夢の英語のテストの点数並にあ
りえない。

・・・とか、考えていても、全く傷付かない。

それ程までに、新實は、遠い。

「ホント凄いや、直哉は。尊敬に値するよ」

「いや、だから何が？」

「私もそう思うな、直哉くん」

「・・・だから、何なんだよ、姉さんまで・・・」

いや、どう考えても皆でからかっているとしか考えられないんだ
が。

「・・・別に、アタシは・・・そんなコトなんて思っ
てないから！
なーちゃんこっち見ないでよー！！」

・・・怒られた。

全然理由がわからないのだが。

とにかく、紫朋は機嫌が悪そうだった。

よくわからないけど、この話題がイヤなのだろうか？

と、考えた僕は、とりあえず話題を変えてみることにした。

「そんなコトより帰ったら久々にトランプでもやらない？僕はババ抜き希望で」

久々も何も、ほぼ毎日やってるんだけどね。

でも最近は大富豪とかが多くて、あまりやってない気がした。だけ。

「あ、直哉くん・・・それなんだけど・・・」

「俺と禮音は生徒会の居残りがあるんだ」

「だから・・・今日は先に帰ってくれないかな？」

「え？」

別に珍しい事じゃない。

これまでに、そんなコトは多くあった。

「べ、別にいいよ、そんなの待ってるよ。ねえ、紫朋？」

ただ、それを待っていない日は、ほとんどなかった。

それも、先に帰っていてくれ　なんて頼まれたのは、初めてだった。

「あ、ごめん・・・私、今日ちょっと美保ちゃんに話したいコトがあったさ。二人つきりで帰りたいんだ。ホントごめん！なーちゃん先帰ってて」

「・・・うーん、なら余計僕、待ってた方がいいんじゃない？」

どうせ、一人で家に居てもやる事がない。

「ごめんなさい・・・私達、結構遅く鳴っちゃうから・・・直哉くん、部活動入ってないでしょ？追い出されるわよ・・・」

「そんなの、どうにでも・・・」
違和感があった。

「こんなの、初めてだから」

だから、僕も少し必死に食いついた。
けれど。

「今の季節でも、冷える時は冷えるから。外で待っていると風邪引いちゃうから。今日だけは先におうちで待っていてくれないかな？」

姉さんが、笑ってた。

いつもとは違う、笑顔。

この笑顔は『そういう』笑顔だ。

ワガママを言う子供を窘める母親の笑顔。

「だから・・・悪いんだけど、今日は一人でご飯食べてくれないかな・・・」

「・・・どんだけ、遅くなるつもりなんだよ・・・」

『一人』で

違和感が、あった。

だけど、姉さんは僕を『そういう』笑顔で、見る。

つまり、僕はここでは邪魔でしかないってコトで分かったよ。たまには拓夢を連れ添って帰るよ」

そう言うしか、僕には無かった。

例えば。

新しい日常が。

入り込む余地があるとしたら。

それは。

最も近い。

日常の中。

S p a d e - 0 1 ゼロからイチへ - GAME S T A R T - (後書き)

さて、前回からここまで、かなり修正しました。

まあ、かなり時間がかかりましたね・・・更新が遅くなっ
てすみませんでした><

とりあえず、次回『ゼロからイチへ』。

S p a d e . - 0 1 ゼロからイチへ - G A M E S T A R T - (前書き)

『ゼロからイチへ』

初めてだった。

なら、それは新しい日常だ。

差異によつて分かたれた新たな枝だ。

修正の効く範囲であり。

そして偶然伸びてきた新しい世界だ。

やや大袈裟^{おおげさ}。

そんな大層なモノでもないのだけれど。

いつもと違うコト　なんてモノが起きる度、無駄にドキドキして。

それは『始まり』だろうか？

寒かった。

冷え過ぎだ。

今は夏なのに、寒い。

結局僕は、新實と姉さんを待った。

けれど、いつまで経っても出て来なかった。

そして、僕は追い出された。

それでも待つていたら、いつの間にか周りは暗くなっていた。

どこかで入れ違ったのか。

先に帰っていたのか。

わからない。

まあこの一件は水に流すでしょう。

「うう・・・さむっ・・・」

数十メートルの距離。

こんなのに帰宅も何もないだろう。

ただちよつと歩くだけ。

けれど、今はその距離が長く感じた。

一人で帰るのは、初めてだ。

いつも隣に誰か居たから。

大抵四人で。

どんなに遅くなつていても、待っていた。

たまにどうしても無理だと言う時には紫朋と帰って。

二人で遊んで、新實と姉さんが帰ってきたら、出迎えて。

それでまた遊んだ。

そして食事をして、寝る。

それも日常。

『四人で帰宅する』 日常と。

『紫朋と帰宅する』 日常。

何度が繰り返されて、枝分かれした日常。

この二つのパターンを、どちらか毎日繰り返し続ける。

それが日常。

ただ、今日だけは。

『一人で帰宅する』 日常が生まれた。

新しく枝分かれた。

だから、その初めてはじめにウキウキしてた。

だから、その始めてはじめにドキドキしてた。

だから、その創はじめてにワクワクしてた。

GAME START

たったその距離だった。

遠い。

近い距離だった。

近い距離のハズだった。

遠い。

何故遠い？

家。

そう、家が。

家が 見えない。

「・・・なッ!？」

無い。

家が無い。

学園からでも見えるハズの、僕の家が。

無い。

僕達の家が！

「・・・道に迷ったのか・・・？」

後ろを向く。

学園は、ある。

なのに。

なのに、町並みは、知らない。

「どこだよ、ここ!！」

知らない道。

知らない家。

知らない交差点。

どこからか、知っているモノが知らないモノに『替わって』いた。

「なんだよ!なんだよ、これ・・・!？」

知っていて知らない。

知らないのに知っている。

気味が悪い。

気持ちが悪い。

だって、そうだろう？

例えば半分ムカデで半分ゴキブリなんて虫が居たら、気持ち悪い
だろう？

そう言ったモノに、全身を隈無く這われたら、気持ち悪いだろう？
根源的で生理的な気持ち悪さ。
気持ち悪い

この中途半端におかしい街が。
僕の世界が！

こんなの、僕が見ている世界じゃない！

ここは、半分、今まで僕が住んでいた世界じゃない！

「くっ・・・うっつ・・・!!」

人は皆常識とか、認識とか、そういうのを持っていて。
それは記憶と自我から作られている。

他の人の視界を視る事が出来ない以上、自分が全てで。

その自分が見ている景色が、自分にとっての世界で、最も信用出
来るモノ。

人が言う『普通』なんて、本当は平均なんてモノじゃないのだ。

その人の世界で『当たり前』と適当に定義された経験観が『普通』
で。

つまり、それはその人”だけ”にとつての『常識』で。

それが『普通』。

だけど、これはどうだ!?

こんなの『普通』なんかじゃない!

どこの誰を連れて来ても、コイツが『普通』なんてほざくバカは
居ない!!

「クソ!クソ!クソ!こんなの夢だろ?さっさと覚めろよ!!こん
なの日常じゃない!!こんなの夕子の悪い冗談だろ!!」

怖い。

怖い。

怖い。

堪らなく怖い。

自分の『普通』が一切通じない。

それがこんなに恐いなんて、知らなかった。

『もしかしたら他人は全て偽物かもしれない』。

『今見ている世界が本当で、いつも見ていた世界は偽りなのかもしれない』。

『いつも接していたあの人は、本当は土で出来た人形かもしれない』。

つまり『普通』じゃないってのは、そういうコトだ。

自分が今まで経験してきた記憶や自我とか、そういうモノ全てが信じられない！

自分の記憶の全てが否定される！

こんなの認めない！！

こんなの、現実であって堪るかッ！！

「人は？人は居ないのか！？どこに居るハズだ！ここは異世界なんかじゃない！」

僕は生きてる。

呼吸も出来る。

物質にも触られる。

なら大丈夫なハズだ！！

人間が、他にも居るハズ。

人間を！他の『世界』を探せば、それと照らし合わせて『普通』を見出す事が出来る！！

『普通』なんて『常識』という名の認識

なら人間を、人を、人類を探す。

それが第一歩

「あ」

「くふふっ」

女の子。

小さな女の子。

長くて綺麗な金色の髪に。

遠くからでも目立つ金色の瞳。

ほくたち
日本人より見て分かる程に白い肌。

まるでお人形みたいに、白くて小さくて綺麗な女の子。

「さあ、ナーヤ」

「君は・・・」

「創めようか」

G A M E O V E R

S p a d e - 0 1 ゼロからイチへ - GAME START - (後書き)

さて、ようやく戦闘シーン(?)。

まあ、色々とホラー気味を意識して作ったので、レイアウトを変えてみると結構それっぽくなった。

とりあえず、次回『貴様、識っているか』。

『貴様、識っているか』

ジ・・・

「ナ・・・」

「ナーヤ」

ジジ、ジ・・・

「ナーヤー！」

「ナーヤ、いつしよにあそぼー！
ちがうって。」

おれの名前は『くがなおや』。

『なーや』じゃないって。

「なお・・・？なやや・・・」

「な・・・ナーヤー！」

ちがうって・・・

ああ、『がいこくじん』はややこしいなあ。

『えいご』なんかにたよってるからだよ。

もっと『にほんご』をべんきょうしてよ。

「ナーヤー！おにー！おにー！...」

ザ・・・

おに？

おにじじい？

ああ、いいよ、しよじよ。

ザ、ザ、ザザ・・・

「そお！おに、おにかけっこー！！しよっー！」
「ナーヤがおにでー！」

ジジ、ジジジ、ザ、ザ・・・

「ナーヤが鬼で！」

「『あたし』が逃げるのー！！」

「捕まえて！ナーヤ！」

「うん！」

女の子。

いつも僕の後ろについてきた、女の子。

長くて綺麗な金色の髪に。

遠くからでも目立つ金色の瞳。

ほくたち

日本人より見て分かる程に白い肌。

まるでお人形みたいに、白くて小さくて綺麗な女の子。

「ナーヤ」

ジ、ジ、ジ、ジ・・・

「おおきくなったら、『あたし』」
「になりたい！」

ザアアアア・・・

「だから ナーヤも」
「ナーヤ」

ジジジジジジザアアアア!

ノイズが酷い。

聞こえないよ。

なんだって？

大きくなったら、何になるって？

僕に何をしろって？

分からないよ。

だって、君はもう

「くふふっ」

こんなに大きく、なったじゃないか。

「・・・君は？」

女の子。

いつも僕の後ろについてきた、女の子。

長くて綺麗な金色の髪に。

遠くからでも目立つ金色の瞳。

日本人より見て分かる程に白い肌。
ほくたち

まるでお人形みたいに、白くて小さくて綺麗な女の子。

「さあ、ナーヤ」

夢の中の彼女が。

今目の前の彼女が。

同時に手を差し出す。

白くて細くて綺麗な手を。

そして、僕はその手を取って一緒に駆けた。

一緒に走って日が暮れるまで遊んで。

喋って笑って燥あせいだ。

そういう夢。

昔の夢。

そう、昔。

夢からどれだけ経ったのか。

「君は……」

変わらなかった。

昔のまま。

あの小さな女の子のまま。

金色の髪を靡かせて。

金色の瞳を瞬かせて。

白い肌を夜に晒して。

立っていた。

笑いながら立っていた。

「創めようか」

「ナーヤ」。

特別な名前。

あの時の彼女はそれが言えなくて。

だから僕と彼女だけの特別な名前。

僕の名前。

そう、僕の大切な名前。

けれど。

けれど……、なら、彼女のは？

名前。

その自我の大半を占めている大きな概念。

空閑直哉。

僕の名前だ。

なら。

彼女の名前は。

僕は、彼女を何と呼んでいたのか

ノイズ。
記憶に含まれる雑音。

ジ、ザアアアアアア...

彼女と昔交わした『やくそく』。
それはノイズに塗れていて。
「そうだ」

ジ・・・

思い出せない。

ジ、ジ、ジ、ジ、ジ・・・

「遠く誓った我と貴様の
ノイズ。」

ノイズが酷い。

小さい女の子が、ノイズの黒い線に塗り潰されて。

ジ、ジ、ジ、ジ、ジ、ジ、ジ、ジ！！

風景が。

半分だけ知っている街が、黒い線に埋め尽くされて。

見えない。

リアル現実の世界が。

たった今。

この場所の、目の前が。

黒と白に埋め尽くされ、何も見えない！

ジ！ジ！ジ！ジ！ジ！ザアアアアアア！！！

「頭・・・っ！が、割れ・・・っ！」
聞こえない。

聞こえるのは不快な不協和音。

鼓膜が破れる程の凶悪な雑音が、そのまま頭痛に変換されて。
気付けば頭を抱えて、掻き毟っていた。
けれど、激痛はどんどん強くなっていった

「約束を 果たして貰うぞ、ナーヤ」

そして、世界が『替わった』。

赤く。

朱く。

紅く。

聞こえたのは声。

凄まじいノイズ中、澄んだ声が一つ響き渡って。
作られたのは赤く染まった世界。

真紅の夜。

赤い夜空。

元居た世界は遍く消えて。

この果てなく朱い世界が『取って替わった』。

「さあ、有り金全て差し出せッ！！」

「互いの血と肉と髪の毛の全てを賭けて！！」

「この場所での瞬間で、たった今！最高の戯れを交わそう！！」
そして、彼女は叫んだ。

魂からの震撼の叫びだった。

それは名乗り。

盛大で。

大仰で。

絶世な。

名譽の咆哮が終わって。

「くふふっ……貴様、識っているか　？ 頬の肉は、最も旨い」

ゆらり。

ゆらりと。

半透明の触手。

彼女の周りに、クラゲの足みたいな触手が、現れた。

地面から　いや、彼女の身体から地面へ伸びて、身体を空に支

えている。

「　” 快樂エデンの御手” 」

そう言っつて、彼女は手足を広げた。

新しく生えた六本の手足。

彼女の背中から生えている、半透明の触手てあし。

その姿はまるで

「くふふっ……貴様の快樂は、何色だ　？」

天使だった。

さて、天使いいよね、天使・・・いや、これは天使じゃないか。

まあ、戦闘シーン、上手く書けたらいいなと思います。

とりあえず、次回『死』。

「ユ！」

音が風を切った。

「避けてみせろ！ナーヤ！！」

「ッ！？」

同時に響く声。

それに釣られるように、身体が勝手に動いていた。

意図するより早く、地面へ無様に這い蹲る。

瞬間。

グシャアアアアアア！！

轟音が響いた。

「・・・な・・・っ!?!？」

愕然と、立ち竦む。

塀が。

隣のコンクリの塀が。

木端微塵にされていた

「くふふっ・・・やはりあの俗物で練習した甲斐があった・・・コ

イツはもう、我の意のままだ」

気がつけば、既に目の前に彼女が来ていた。

遙か天空から、一瞬で。

だけど、それに驚く暇なんて一瞬も無かった。

「さあ！我を楽しませろ！ナーヤ！！」

「くッ！！」

触手が振るわれる。

その事実を確認するより早く、僕は身体を横へ投げ出してい

た。
そして。

グシャアアアアアアッ!!!

今まで立っていた場所に、『また』轟音が鳴り響く。
ちよつと離れただけの、その場所。

その部分のアスファルトが、完全に砕け散っていた。

「・・・ッ!!!」

鳥肌が立つ。

飛び出した際、擦り剥いた膝ひざと肘ひじが痛む。

そりゃコンクリの道へ思いつきりヘッドスライディングしたんだ。
打ち付けた場所も、かなり痛い。

けれど、相手はあのコンクリすら一瞬で粉々に吹き飛ばす触手だ。
避けなきゃとりあえず確実に『ダンプカーはに撥ねられた方がマシ』
レベルの惨状になってしまう

「く・・・くそっ・・・!!」

ふと気を抜けば、震えて動けなくなる身体を必死に押さえ付けな
がら立ち上がる。

「くふふっ！まだ終わらんぞ、ナーヤ!!!」

「くそッ!!!」

楽しそうに。

本当に愉たのしそうに、彼女が触手を振るう。

まるで、お気に入りの玩具を手に入れた子供の様に。

僕に向かって、触手を伸ばす。

凄まじい勢いで。

直撃すればコンクリすらも粉碎する運動エネルギーを備えて。

正面から二本。

死神の如く触手が迫る

！

「ッ!!!」

疲れと恐怖に震える足を力で黙らせて、思い切り地を蹴り飛ばす。
選択の余地なんて一切ない。
とりあえず動く。

車が一切通っていない車道に思い切り身体を投げ込む。

ヒュッ！

耳元で、触手が風を切る。

「ぐッ！！」

そして、地面に衝突した時の痛み。

「くふっ、くふふっ・・・楽しませる、楽しませてくれる、ナーヤ・
・・・」

また、触手を避けるコトが出来た。

けれど、『生きている』なんて実感は全く沸かない。
僅かな差。

耳のすぐ側を通った、あの死の鎌。

既に目に見えている。

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・！！」

恐怖が疲れを増増させて。

疲れが恐怖を増増させて

そんな悪循環が一瞬で体力を奪い去って。

立ち上がるコトすら困難。

「くそ・・・っ！くそ・・・っ！！」

恐怖に震える。

この差が無くなる未来は、あまりにも近過ぎる
いや、次。

「くふふっ・・・さあ、ナーヤ・・・」

彼女が撫でている、あの触手。

あの凶器がもう一度振るわれたら。

もう、避けられない

つまり。
つまり

死。

死ぬ。

死ぬ？

「・・・っ!!」

当然だ。

あんな衝撃を受けたら、人は確実に死ぬ。
死ぬ。

僕の世界が消える。

僕が世界から消える。

認知されなくなる。

つまり、どうなるんだろう？

他人の『普通』から、僕は居なくなる。
存在しなくなる。

消える。

僕が消えた世界。

僕が居ない世界。

それが当然になる。

「は、は・・・」

怖い

今更、恐怖が湧き出してきた。

僕は、もう姉さん達とは喋れなくて。

姉さん達も、僕とは喋れなくて。

そんな日常が続いて。

やがてそれが『普通』になって。

僕の存在が、世界に組み込まれなくなる。

どの『普通』の中にも、僕は存在しなくなる。

誰の『普通』の中にも、僕は存在しなくなる

「・・・イヤだ」

イヤだ。

嫌だ。

「・・・夢」

「ん・・・？」

嫌だ！！

「こんなの、夢だろ・・・？」

ありえない。

ありえて、たまるものか。

こんな赤い夜空も。

半透明な触手も。

それを身体から生やす、夢に見た小さい女の子も。

「・・・夢、だろ」

塀を壊した？

粉々にした？

アスファルトを？

コンクリだぞ？

世界級の武道の達人でも、そんな事できっこない。

支えがある、等身をかなり越えたコンクリートの塊を、一撃で。

何の器具も無く、アスファルトを、一瞬で。

そんなの。

出来るワケがない！

不可能だ。

そんなの、ありえない。

こんなの。

「夢・・・」

こんなの、『普通』じゃない。

「こんなの夢だろ！？返せよ！僕の日常を！ふざけるなよ！これ以上僕を巻き込まないでくれ！！」

こんなの、違う！

『普通』じゃない！

そんな『世界』を、僕は認めない！！

こんなの有り得て堪るかッ！！

「愚かだ」

だけど。

「現実を否定するのは、愚かだ」

「例え真実から目を逸らしても。他人の存在を許容出来なくとも」

「現実を否定した時点で、貴様は既に死んだのだ、ナーヤ」

「だけど、ソイツは否定した。」

犯人。

僕の日常を壊した犯人。

コイツが壊したクセに

そうだ。

コイツが、コイツが

コイツが壊した！！

「ふざけるなアアアアアアアッ！！！！」

走る！

敵。

拳を握って、振りかぶる！

コイツは敵。

殺意。

敵は。

敵は殺せ！

その小さい頭に向けて、思い切り振り下ろす！！

「あああああああああああああああッ！！！！」

知らなかったのか？

人を殺すのは、こんなにも簡単

「貴様、識っているか？」

グチャ！

「あ、がッ!!」

止まった。

時間が。

時間が、止まって。

変な音と共に、彼女との距離が。

不意に、留まった。

「限度を超えた快樂が苦痛ならば」

痛い。

腹が。

熱い。

胸の下辺りが。

「がは　ッ!!」

口から、大量の唾液・・・?

「苦痛は『限度を超えただけ』の快樂なのだ」

空いた腹を通して。

身体に触手が巻き付く。

「あ、あ、あ・・・あ、あ・・・」

ゴリッ!

厭^{イヤ}な音がして、口が開く。

自分の意志で開けたんじゃない。

空けられた。

触手に。

器用に空けたワケじゃない。

骨を抉って、無理矢理空けさせられた。

「あ・・・あ・・・あ・・・っ!」

痛い。

凄まじい激痛。

けれど、叫べない。

だけど、実はそれは。
序の口で。

「さあ、ナーヤ」

気付けば。

触手が。

彼女が取り出した触手が、目の前にあった。
先端に大量の”針”がついた、凶悪な触手。
「遠い日の約束 果たして貰うぞ」

笑った。

彼女が笑った。

微笑みを浮かべて、彼女は。

その触手を。

グチャ。

『押し込んだ』。

「あ」

大量の針に。

食道が、肺が、胃が。

射貫かれて。

なお。

触手は進む。

視界が真っ赤に染まる。

朱く染まった世界が、更に赤く。

真紅まっかに。

さて、黒くて。

まあ、暗くて。

とりあえず、次回『記憶』。

『記憶』

S e a s o n . 2 0 2 記 憶 : T h e R e m e m b r a n c e . (前 書 札)

知っている？

こつこつ時、どんな気分になるのか。

例えば。

家族とか。

友人とか。

身近な。

そういう大切な人が浮かんでは。

消えて行く。

走馬燈。

そういうのが見えるって、聞いたコトがある。

だけど、そんなの迷信なんだよ。

あつたのは。

暗くて。

恐くて。

暗くて怖い。

恐怖。

恐怖。

不安。

生きたい。

切望。

生存。

生きたい。

本能。
渴望。

それ以外の感情モリが働かない。

暗い。

恐い。

・
・
・

生きたい。

イキタイ。

そう、イキタイ。

イキタイ

イキタイ！

生きて！

生きてまたあの日常へ！

退屈で。

何も起こらなくて。

平和で。

危ないコトなんてなくて。

暢気のんきで。

その大切さにも気付かずただ笑ってた日々へ！
そんな愚かで怠惰たいだで。

ただ『普通』にあった日常へ！

イキタイ。

恐い。

生きたい。

暗くて恐い。

生きたい生きたい生きたいッ！！
死にたくないッ！！

GAME OVER

「くふふっ……」ここ”では理性はすぐ蒸発し

「そして、異常な速度で”それ”が根付く」

「ほうら」

声。

声が。

聞こえる。

「バケモノ人外の出来上がりだ」

嬉しそうに。

彼女は云う。

バケモノ人外。

ああ

わか解ってしまった。

「……」

生きていた。

胸を貫かれて。
腹を裂かれて。
臓に穴が空いて。
なのに、僕は生きていた。

バケモノ
人外。

解わかってしままう。
自分ぼくはもう。
人間ふつうじゃない

「ハハハハハハハハッ！！好イ！最高イに好イ気分イだナーヤ！！」
笑わう。

彼女カノジョが笑わう。
狂くるった様ように。

異常イチャウに歡喜カンキしていた。

「アア！待まちった！待まちっていたぞ！この日ひをこの瞬間しゅんかんをツ！！」
ゆゆらり。

ゆゆらりと触手てあしが揺ゆれて。

「さあ、直哉エツヤアアアアアアツ！！」
彼女カノジョが、”快樂エツランの御手ミテ”を振ふるつた

「・・・」

音速オンソク。

そんなモノ、軽かろく越こえている。

異常イチャウな程ほどの運動ウツドウをエネルギーを備そなえた『それ』。

早はやく。
速すみく。
疾はやく。

凄まじい速度スピードで空そら気を斬きり裂きいて。

僕に迫る。

「・・・」

『それ』を僕は。

避けた。

ドガアアアアアアアアアッ！！

後ろから凄まじい轟音。

家でも吹き飛んだのだろう。

「そう！そうだナーヤ！その身体はキモチイイだろう！？最高にッ

！！」

叫び。

彼女が触手を振るう。

今度は四本

銃弾なんかとは比べ物にならない程速い。

本来それは、生物イキモノなんかには到底反応を許されない速度。

どうやら彼女は、今まで手加減していたらしかった。

「・・・ッ」

トン。

だが、それも。

地を軽く蹴って自分の場所を少しだけズラす。

それだけ。

たったそれだけで、四本もの死神の鎌は僕に触れるコトすら無く、隣を素通りしていった。

「くふふっ・・・視みえる・・・アア！視みえるだろう、ナーヤ！」

そう、視みえる。

簡単。

あまりにも簡単な。

世界の理。

視^みえてしまう。

「さア！さア！さア！ナーヤ！ 我を殺してみせろッ！」
いつまでも攻撃しない僕を見て、彼女は叫ぶ。

どうやら焦れたらしい。

異常な提案を彼女は平然と僕に云^いう。

だけど、それは異常でもなんでもなかった。

この場では。

”ここ”では、それが『普通』。

”ここ”はそれを行う場所。

”ここ”はそれを行う為の場所。

その為の”朱”。

朱い世界。

この世界は狂っていた。

でも、それが当たり前で。

だから、それは『普通』で。

むしろ、それを行うべきで。

そう、ここは、もう僕が居た世界とは、まるで違う、違い過^ぎえる。

だけだ。

「・・・イヤだ」

それでも、僕はそれを拒んだ。

その言葉を聞いて、彼女は暫し驚愕^{きょうがく}してて。

叫んだ。

「何故・・・何故だ!？」

「・・・イヤに決まってるだろ」

それも簡単で。

「・・・人を殺したくない」

それが僕の『普通』。

そんなの・・・

そんなの当然じゃないか!

ここがどんなに異常だつて。

相手がどんなに憎くても。

『人を殺す』。

そんなの、”いけないコト” だろう!?

解っていた。

例え、”ここ” がそういう場所だと解っていても!

僕の『普通』は変わらない!

「・・・返してもらおう」

「僕の『日常』を」

「君にはそれだけしか用は無い」

簡単。

今の僕には簡単。

「・・・僕は”ここ” から・・・勝手に出て行く」

そんなの、扉を開けるよりも簡単。

「後は君の好きにすればいい」

だけ。

その時、彼女は。

「くふふっ」

笑った。

「なるほど・・・我はまだ、貴様と同じ舞台へ立っていないというコトか・・・」

「なるほど・・・我はまだ、貴様と同じ舞台へ立っていないというコトか・・・」

「なれば楽」

「ならば簡単な話だ」

笑っていた。

楽しそうに。

愉たのしそうに

「面白いゲームだ」

「ここで貴様が我を殺さなければ」

「貴様の『家族』とやらを皆殺しにするとしよう」
そう言って、彼女は嗤わらった。

S p a d e - 0 2 記憶 - The Remembrance - (後書き)

さて、色々かなり黒くなってきたかなあと。

まあ、もっと戦闘シーン入れていきたいですね、個人的に。

まあ、次回『終焉』はじまり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4261j/>

Trump

2010年10月11日02時37分発行